

第1回新しい長崎県づくり懇話会

- 1 日時 令和5年2月8日(水) 14時00分から16時30分
- 2 場所 長崎県庁 大会議室B
- 3 議題 「新しい長崎県づくり」のビジョンについて
- 4 配付資料
 - 新しい長崎県づくり懇話会委員名簿
 - 資料1 新しい長崎県づくり懇話会開催要綱
 - 資料2 「新しい長崎県づくり」のビジョンについて
 - 資料3 新しい長崎県づくり懇話会においてご意見をいただきたい内容について
 - 参考1 令和5年度重点テーマに基づく主要施策(素案)
 - 参考2 長崎県総合計画チェンジ&チャレンジ2025
- 5 出席委員
 - 安部 恵美子 長崎短期大学 学長
 - 入江 英也 佐世保工業高等専門学校 准教授
 - 大川 香菜 みなとや 海女女将
 - 菊森 淳文 公益財団法人 ながさき地域政策研究所 理事長
 - 楠本 美貴 にじがおか食育ファーム 代表
 - 佐々木 達也 公募委員
 - 佐藤 快信 鎮西学院大学 現代社会学部 教授
 - 下川 卓郎 株式会社 NAVICUS九州 代表取締役
 - 艶島 博 十八親和銀行 執行役員 地域振興部長
 - 中島 みき 株式会社カヤック ちいき資本主義事業部 部長
 - 永田 康浩 長崎大学医学部地域包括ケア教育センター 教授
 - 村上 純志 株式会社 サイノウ 代表取締役
 - 矢内 琴江 長崎大学ダイバーシティ推進センターコーディネーター/准教授
 - 山本 直子 公募委員
- 6 議事録

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

皆さんこんにちは。定刻となりましたので、ただいまより、第1回長崎県新しい長崎県づくり懇話会を開催いたします。まず初めに、大石知事の方からご挨拶をさせていただきます。

●大石知事

皆様、こんにちは。

本日は大変お忙しい中、このようにお集まりいただきましてありがとうございます。また、日頃から県政にご理解とご支援をいただいておりますことにも、重ねて御礼を申し上げたいと思います。

この度は、新しい長崎づくりに向けてビジョンを策定するという、もう一つ長崎県総合計画につきましても、来年度3年目を迎えるというところもありまして、また、それだけではなく、様々な情勢が変わってきているところがございます。

コロナも含めですけれども、国際的な物価高であったり円安であったり色んなものが重なっていて、それに合わせた形に見直すことも必要だろうということで、今回のこの機会をいただいているところでございます。

今日は、まず皆様に、いろんな視点からご意見をいただくと。第1回目ということで、皆様方がお互いに発言しやすいような雰囲気づくりというのがありますけれども、今日はどちらかというと自由闊達にご意見をいただけるようにさせていただければというふうに思います。

本県の今後の方向性ということは、様々な機会に申し上げておりますけれども、まずは、基軸を「未来への投資」ということで、「子ども施策」に位置付けたところでございます。

それ以外にも、みんなが安心・安全に、どこに住んでいても安全に暮らせる社会づくり。また、長崎だからこそチャレンジができるということ。

それ以外にも、県外・国外に向けて、しっかり長崎の良さを、新たにコンテンツを作っていくということも大切だと思いますけれども、もう既にある良さというものもあると思います。そういったものをしっかりと戦略的にアピールをしていって、この長崎のブランディングをしっかりとやっていこうというところに力を入れていきたいと考えております。

人口減少を考えますと、これまで人口減対策もしっかり取り組んできて、一定の効果もあるように思っております。ただ、未だに厳しい数字が続いているということ。

その中で、私もそうだったので思うんですけれども、「県外でしか自分がやりたいことがない」と、強い思いがあらわれて出て行く方については、僕はしょうがないと思います。ぜひ、そういう大志を抱いている方々のことは、長崎県としても背中を押して応援をしたいというふうに思っておりますけれども、「まだ長崎でもやれるかもしれない」、「長崎のことをまだ十分に知識を得てない、情報を得てないということで、長崎ではそういったチャレンジができないんだ」と思われて、仕方なく外に出て行かれるような方々については、やはり、残念な気持ちもございますので、そういった方々をいかに、必要な情報を必要なタイミングで必要な量をしっかりと届けるか、そういったことも考えていかなくちゃいけないんだろうと思います。

本県は、やはり離島が一番多い県でございます。また、半島も多くて中山間地が多いと、そういった特別な地形もあって、やはり、地方に行けば行くほど高齢化が進んでいて、また過疎化も進んでいる、そういった傾向があるように思います。そういった中で、社会の機能を維持してい

くのは、非常に難しくなっている。これはもう日本の縮図なのかもしれないというふう
に感じておりますけれども。ただ、それを、ちょっと見方を変えると、そういった今までのアナ
ログな世界で対応しきれなかったものが、これから新たなやり方を変えること、テクノロジーを
入れること、それによってより良い社会ができるチャンスじゃないかなというふうに思っていま
す。

ですので、この長崎だからこそ、そういった新しい取り組みができる。新しいテクノロジーを
導入できる。もしくはもうソフト的にそういった縮図、10年後20年後わかりませんが、
これから日本が迎えていくような社会の形というものを、我々はもう先んじて見ているとい
うことから、この日本に向けて、こういった解決方法があるんじゃないかというようなことを長崎か
ら打ち出していけるような、そんな位置付けも、我々の責任もあるのかなというふうに考えてい
る次第でございます。

今、長崎は100年に一度ということによく謳われておりますけれども、何か1個が変われば、
がらりと未来が変わるものではございませんので。

本日は、本当に様々なバックグラウンドをお持ちの皆様が集まっております。ぜひ、
皆様のご知見、ご経験の中からですね、自由闊達に、忌憚ないご意見をいただければというふう
に思います。

皆様のご意見を参考に、長崎県政のさらなる発展のために、実効性のある総合計画であったり、
また、夢のあるようなビジョンを県もしっかりと、肉付けしていくつもりではいるんですけども、
その参考にさせていただければというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いたい
します。

本日の議論がまず活発になることを期待しておりますし、本日お集まりいただいた皆様の更な
るご健勝ご多幸を願っておりますので、どうぞ今後ともよろしく願いたいします。本日は、本
当にありがとうございます。

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

続きまして、委員の皆様の自己紹介をしていただきたいと思います。一人一分程度で安部様か
ら時計回りをお願いいたします。

○安部委員

皆様、こんにちは。安部と申します。

あ行なので多分私がトップバッターだと予測しておりました。よろしくお願いいたします。

私は佐世保で長崎短期大学の学長をしております。前の総合計画懇話会の委員もさせていただ
いておりました。

私は長崎で生まれて、学校卒業後、縁あって長崎に帰ってきて、教職に就きました。専門は教
育学でございますので、乳幼児期から青年期までの地域の子供たちの育ちや彼らの成長を促すた
めには、学校や家庭、地域がどのような役割をするのかということ、自分の仕事や子育てを通
じてずっと考えてきたような気がします。

今、歳をとりますと、卒業生や教え子が地域で様々な形で生き、仕事して、次世代を育ててい

る姿を見るのが一番の楽しみです。

そんな中で強く思いますのは、彼らや彼らの子ども達がずっと安心して暮らせる長崎県、地域を残さなきゃいけないということです。そのために、先の世代である私たちがやらなければならないことについて、この席で考えていきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○入江委員

安部様の素晴らしいスピーチの後で非常に緊張してしまいます。佐世保工業高等専門学校の入江と申します。

私は、高専を卒業しまして、大学に編入にしまして、在学中にITの会社を起業しまして、30年ほど福岡と上海とバンコク、マニラでITの会社を経営しております。佐世保高専の教員は、国立なので、本当は兼業できないんですけども、国のクロスアポイントメント制度という兼業制度がございまして、高専第1号ということで佐世保高専に2019年から着任しております。

ミッションとしましては、高専生のアントレプレナーシップとグローバル、あと地域連携の仕組みを作れというお題で、派遣というか、着任しております。

県北唯一の理系の高等教育機関ということで、佐世保をはじめとして、もちろん長崎とかでいろんなコミュニティづくりをさせていただいています。私ども高専は、全国に57校ございまして、このネットワークを活用しながら県北から学生をどんどん輩出していきたいなと思っております。

また、熊本にTSMCができるということで、今、熊本高専と佐世保高専が連携して半導体関係の人材育成を行っておりますので、そちらにつきましても引き続きよろしくどうぞお願いいたします。何かそういった知見でお役に立てればと思います。よろしくどうぞお願いいたします。

○大川委員

こんにちは。長崎県の壱岐島というところから来た大川と言います。

私は、10年前に25年ぶりの海女の後継者として壱岐に住みついて、壱岐で知り合った男性と結婚して、海女と釣師の宿と食堂を運営しています。その他に、地域団体の活動をしていて、「たちまち」という活動をしていまして、小学校区が一緒の三組の夫婦が主体となって、地域の子どものごこと移住してくる方、住み替えお住まいのごこと、みんなで1件1件空き家を回って空き家の調査をしたり、移住してきたい方の相談を受けたりということで、みんなで活動をしています。

特に、少ない人数ながら、子ども達の未来に本当に何が残していけるのかということと可能性、島に住んですごく良い環境で暮らしてはいるんですけど、この自然を最大に利用して、ここでしかできない子育てをどのようにやってくかというのを地域団体の方と一緒に考えて進めているところで、今回、長崎県が子どものごことに重点を置いているというお話も伺ったので、私はそんなにたくさんの詳しい知識があるわけではないんですけど、実際に島で生活しているリアルな状態、状況だったりとか、考えていることだったりとか共有させていただいて、何か一緒に長崎の未来を作っていけたらいいなと思って来ました。よろしく申し上げます。

○菊森委員

公益財団法人ながさき地域政策研究所の理事長をさせていただいております菊森と申します。

私は 20 年前に長崎県に招聘をいただいて、当時、東京におりましたけれども、こちらにも参らせていただいて、もうあっという間に 20 年過ぎてしまいました。その中からいろいろな長崎県のことを拝見していますと、非常に魅力的な県であるというふうに思います。

それ以前は、私も若い時に三井住友銀行にいまして、日本総合研究所に移籍して、それが大きなきっかけになって長崎県に来させていただいたということでございます。

課題先進県という言葉がありますけれども、長崎県もその一つだろうと思います。高齢化とか少子化ももちろんでありますけれども、逆にこういった環境の中でどのようにこの県を発展させていくことができるんだろうかということに微力ながら取り組ませていただいて参りました。

それで、一つは私どもが今受託させていただいてる婚活サポートセンターという機関が、県庁 2 階に今、移転してございますけれども、結婚の件数を増やしていったり、あるいは子育て支援をしていったりするということはこの県の非常に重要なテーマであろうというふうに思っております。

一方、高齢化が進んだり、少子化が進んだりしても、スマートシティとかスーパーシティとか、あるいは今研究に取り組んでおりますメタバースの活用など、非常に大きな武器になる ICT の世界が、DX の世界がありますので、そういったことにも力を入れていきたいと思っています。

地域バランスを考えた時に、私は今長崎市に住ませていただいておりますけれども、佐世保商工会議所の相談役をさせて頂く中で、県北をもう一度、産業構造の転換などに取り組んでいきたいと思っています。また、五島、壱岐、対馬それぞれ魅力的な離島があります。こういった離島をどのように発展させていくか、これも大きなテーマだと思っています。いずれ私自身もこれだけネット環境が整備されてきましたから、いろんな仕事の仕方があると思いますので、3 地域間居住も可能になると思っております。

今後、私自身も自己実現したいテーマに取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○楠本委員

皆さんこんにちは。どうもたくさんはじめましての方がいらっしゃるので緊張するんですけども、私、にじがおか食育ファームというところを運営しております、そこの代表をやらせていただいております。

にじがおか食育ファームってなんだろうと思われる方たくさんいらっしゃると思うんですが、簡単に説明すると、食を通して心身ともに健康で、あと、健康な人の人づくり、土台づくりっていうところをテーマに、その人々がまちを作って自立していくっていうことをテーマにした場所となっております。今、南島原の農作物と、東彼杵町のお茶とかも取り扱いをさせていただいて、その農家さんと知り合うことで、長崎の人の素晴らしい方をピックアップして、そういう方たちを魅力的な人だとして紹介していくことで、長崎が人口減少している中で、子ども達が憧れるような人を紹介したりだとか、様々な長崎の文化を残していくような活動を、食を通して子ども達にまずは伝えていくっていうことからやっていきたいなと思っています。

それで、長崎に留まりたいな、もしくは長崎に行ってみたいなって思うような場所づくりとい

うことをやっていきたいと思ってますので、微力ながらですが何か私の経験を活かしてできることがあればやらせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○佐々木委員

皆さんこんにちは。公募委員の佐々木達也と申します。今日是对馬からやって参りました。

私、昭和56年生まれでして、もうすぐ42歳になるんですけども、出身は西海市、旧西彼町です。長崎県が離島と半島と多いところの半島で生まれ育ちました。高校は長崎の高校に毎日バスで通っておりまして、縁合って福岡に行きまして、表現に関する学校に入って、そこでそのあとに長崎に戻りまして、長崎、諫早市でケーブルテレビの仕事をしていました。番組制作をやりました。それでご縁がありまして対馬に行きましてそこで足かけ15年ほど地域の情報発信ということに携わって参りまして、今はフリーランスで活動をしております。番組を制作したり空撮目的でドローンを飛ばしたりしております。

私は、情報を伝えるということが地域のためになるというふうを考えて起業したわけです。番組制作もしますし、観光ガイドもやります。いろんな形で情報発信していくというスタンスでやっております。

対馬に10数年住んでおりますが、対馬の女性と結婚してそのまま対馬にすることにしまして、子どもも2人、幸いなことに来月3人目が生まれます。

地域の人たちに何か伝えるということで行きますと、対馬の歴史を題材にした市民参加型のミュージカルを先日行いました。地域の人が、みずから発信の担い手になるということを中心に取り組んでおります。対馬と長崎は、その物理的な距離以上に、住んでいる人の心の距離があらうかと思えます。こういう場に参加させていただくことで、少しでもその距離を縮められるように、県民の皆さんのお力になればと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

○佐藤委員

鎮西学院大学の佐藤快信です。よろしくお願いいたします。大学名称が変わりまして、以前は長崎ウエスレヤン大学、その時の最後の学長をやっていたのが私です。「貴様は一体何ですか」と言われると非常に困っちゃって。得体の知れない人です。具体的に言うと、住民参加型の地域づくりというのをやっています。

神奈川県横須賀出身なんですけども、1990年にそこから来てもう30年を超えて長崎に居ます。長崎弁がうまくなったかっていうと、得体の知れない、やはり言葉遣いをしているという中で、地域の方からは一応佐藤ちゃんと呼んでいただいております。

それで、対馬の豊玉町と上対馬の基本計画、基本構想を作るっていうのを90年代の前半でやったり、西彼大島の橋がかかった時の将来予想等、そういったようなこともやっていました。

ただ、そうした中で、本当にそれぞれの地域の中での求めるものっていうのは、結構濃淡があるんですね。そういうことを考えた時に、より住民目線の中でどうしていくかというのを始めたのが大体95年ぐらいからで、特に97年からは小値賀にずっと入って、ずっと学生と共に多い時は毎週のように通ってやってきました。そこで、一つはJICAの研修も8年間ぐらい持ち込んでやってきました。結局、そこで何をやったかっていうとJICAの仕事の道具として、役場の今の

多分課長クラスになってる若手を結局どう育てていくかということに使ってた。つまり、単純に外から何かを使うんじゃないで、それを地域の中でどううまく活用していくかという工夫。それもやっぱり、使い方っていうのを教えたつもりでいます。

そのあと、何ていうか自慢するのになっちゃうけど、属島の大島の自治会長を専門家としてフイジーまで連れてワークショップやる。そんなことをやりました。そのことによって、じゃあ何が生まれてきたかっていうと、若い子ども達が、その当時幼稚園であったわけですけど、その子たちが青年海外協力隊になってみたり。それから、あと印象的だったのは、発表会の時に、あるお母さんが「私はおばあちゃんになりたい」ということを叫んだんですね。どういうことかっていうと、小値賀には助産師とかいわゆる産科がない。結局、島外の佐世保で出産しなきゃいけない。普通だったら自分の家で娘の面倒を見るということができないという。それを聞いて、その女の子が長崎大学の看護学部を受けますとか言ってくれる。そういったようなことができたんじゃないかと思っています。

他にも、瑞穂町とか合併前にもずっと関わってました。また、県の方では結構長く関わっていて、もちろん地域政策の合併前のところもそうですし、広域消防も現在とか、それから以前は社会教育の分野でもずっと関わったりとか、いろんなところに顔出してるという、基本的な地域づくりですっていうようなことをやっています。

最近ちょっと学長とかいう機会があったんで少し地域と遠ざかっていたのですが、また現場に戻って、今は諫早の中小企業家同友会の諫早支部の方々とお付き合いがある中で、NPO作っちゃうよって言って、NPOの「シームレス」というのを作って、今、いわゆるフードロスなんか関係するフードバンク、フードドライブとかそういうのをやりながら、諫早市とも組みながら、今、ひとり親家庭の方々に食料とかそういうのを配布するといったようなことをやっています。そういう意味では、学生と一緒に何か地域歩き回るっていうのが好きです。どうぞよろしく願いいたします。

○下川委員

こんにちは。株式会社 NAVICUS 九州の下川と申します。

この会社自体は今年の10月にできたばかりなんですけれども、本業としてSNSを中心としたウェブのマーケティングプロモーションというような活動を行っております。こちらは、例えばインスタグラムですとかツイッターですとか、あとは動画系のコンテンツですとか、そういうようなものを活用して企業様のプロモーションを行うというような活動を行っております。

こちら東京に NAVICUS という会社があるんですけど、子会社というわけではないんですけど、そこで東京での大手企業の事例ですとか最新事例、その情報とかも共有しながら取り組んでいます。あとは、別会社になるんですけども、弟が会社をしているところで「ナガサーチ」といまして、「長崎をサーチする」という素晴らしいネーミングなんですけど、この「ナガサーチ」ということで Instagram ですとかを用いて地域の情報発信をウェブメディアを通して行っております。こちら、Instagram で長崎県の情報発信しているアカウントではたぶん女子大生のアカウントが一番影響力があると思います。それに次いで2番なのかなみたいなことで自己評価を持っております。Instagram や SNS などのところで今回お呼ばれたのかなというふうに思っています。

あとは、個人的なライフワークとして、趣味みたいなもので、地域活性化のイベントを行うのが趣味で市民団体を作っているいろいろやったりしてます。これ、一つはこれ長崎県さんからも協賛を一時期間いただいたことあったんですけども、例えば長崎婚といいまして、1000名ぐらい、500名対500名の合コンを浜町の飲食店26店舗を駆けまわったりして楽しむみたいな婚活イベントやったりですとか、あとハロウィンのイベントもしたりしてですね。浜の町で一気にやったのは、多分僕が初めてののかなというふうに思っています。10年ぐらいですね、コロナ前までですが、いろんなイベントを通して土地活性化にも携わってきましたので、何か今回情報発信できればと思いますのでどうぞよろしくをお願いします。

○永田委員

長崎大学の永田でございます。

大学では、地域医療、地域包括ケアに関わる教育と研究を専門としています。将来これらを牽引する人材育成ということで、医師だけでなく、看護、保健、リハビリテーション、歯科、薬剤師、そして福祉分野の教育に関わっています。医療と福祉の多職種連携教育というのは私の専門の一つです。これからは専門性とともに限られた人材をいかに有効に活用するかということで、このような教育を行っています。

また、離島医療を舞台にして最近取り組んでいるのは遠隔医療やロボットを活用した医療支援なども手がけております。五島でロボットに関するプロジェクトを行いながら、一方で、ロボットには欠けているものにも目を向けながら、最先端のテクノロジーの定着に知恵を絞りながら取り組んでおります。

私自身は長崎出身ではなく、18歳で東京から長崎に来て以来ずっと長崎を拠点としており、人生で一番長く長崎に住んでいることとなります。しかし、この間に国内の異動や、海外での経験もあり、その度に長崎を内からも外からも見てきたので、良さも課題もわかっているつもりです。

今回、何かしらの形で長崎に貢献できることがあれば、ありがたいことだと思っております。どうかよろしく願いいたします。

○村上委員

どうも、こんにちは。はじめましての方もいらっしゃいますけども、株式会社サイノウの村上と申します。

私がやっていることは、ちょっと時間も短いんで説明が難しいんですけども、元々エンジニアで10年くらい経験があるんですけども、そのあと福岡市さんとのスタートアップエコシステムっていうものを10年間ぐらい一緒に取り組みをさせていただいてきました。それを今かっていたら、長崎県さんと一緒にCODEJIMAっていう場所を中心に長崎県内を含めたエコシステムっていうものをつくれなかっていうところでやらせていただいている次第です。

福岡でやってきたっていうんですけども、何か僕個人がやってきたわけではなくて、僕を含めて地元の有志の方達と15年間取り組んできたっていうところがすごくあります。

長崎県内を昨年から回らせていただいているんですけども、僕はよくそのコミュニティづくりっ

て言われちゃいますけども、実は僕はコミュニティづくりできるわけではなくて、コミュニティの方達と一緒に取り組むことがすごく得意なのかなと思っているんですけども。ということはどういうことかという、そういったコミュニティキーマンって方がいらっしやらないと僕は何も役に立たないんですけども。やっぱり、こう回っていった時にもう各地にいらっしやるんですよ。ここ数年、各地域で何かそういった活動が目に見えて動き始めているっていうのをお聞きしていて、今はそういったタイミングなのかなと。そういった方達と一緒に何かこう形にできるんじゃないかっていうところで、私が持っている経験とか、何かこう知見をお役立てできたらなっていくところで関わらせていただいています。

何を言いたいかというと、やはり最初に知事が言われていたように、いらっしやるんですよ。ちょっと東京にも目を向けると、実は月曜日、渋谷区のスタートアップ、産業支援の方の知り合いの子の所に行くんですけども、実はその方も長崎の五島出身だったりするんですよ。だから、「長崎でやっています」って言う、「羨ましい」って。「いいでしょう」と思うんですけども、ぜひこう一緒に絡んでいきたい。

そういった方達がやっぱり県内外にいらっしやるんだなっていうのが本当に長崎の財産というか、すごく強みになってくると思ってますんで、その辺りで私が何かお役に立てればと思いますので、ぜひ引き続きよろしく願いいたします。

○山本委員

皆さんこんにちは。公募委員の山本直子です。

私は、公共図書館に司書として勤めていたのですが、今は学校図書館に学校司書として勤めています。学校の中で子ども達とよく接するのですが、最近気になっているのが、何らかの問題を抱えている子ども達がかかり増えているということです。その背景に、その子ども達だけの問題ではなく、家庭環境が大きく影響していたり、そういう部分があるように思っています。いろいろ見ていて思うのですが、家庭に余裕がないように思います。今後は人口もさらに減っていくので、今まで以上にいろんな部分が不便になっていくと思うのです。その中で、ますます余裕がなくなってくるってことになる、問題が大きくなると思うので、いろんな部分で連携して、地域を維持するような仕組みができればいいなと考えています。そこで、小学校区を中心に、まとまっていければいいのではないかなというところを考えておまして、なぜ中学校ではなく小学校かという、小学校は、保護者の方が必ず集まって来られます。中学校になると子どもさんの手が離れるので、なかなか集まられないのです。そこで、小学校にいろんな方との交流の機会をつくれる場を用意しておくのです。そういうところに老人会とか婦人会の方々も集まってくだされれば、交流ができるので、地域の活性化に繋がると思っています。ただ、学校はやはり勉強を第一にするところなので、先生方はそこまで余裕があられないと思います。そこで交流の場の提供として、学校図書館を使えたらいいのではないかなと思っています。

学校図書館は、学校図書館法で地域の方々に開放することができるということになっておりますので、来ていただくのは無条件と言ってはあれなのですが、交流をする場としては最適だと考えています。今の状態では、婦人会とか老人会とか防災の集まりとか、地域包括ケアもそうですが、各々のグループで活動をされていて、地域の中に点々といろんな組織がある状態なので、なかなか連携となると、声をかけ合うっていうのも難しいと思います。気軽に集まれる場所を提供

できれば、何かこう、連携して生まれるものがあるのではないかと考えているところ
です。

今回、この会に参加して、皆さんの意見をいろいろ吸収してみたいと思っています。よろしく
お願いいたします。

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

オンラインの参加の方はお待ちいたしました。最初に艶島様、接続されてますでしょうか。

○艶島委員

今日はリモートで大変失礼いたします。十八親和銀行の地域振興部の艶島と申します。

当行地域振興部では5年後10年後の長崎を元気にしたいという事をミッションにしています。
今回のような県の皆さまとか自治体の皆さま、また大学とか高専の先生方とも連携しながら、地
方創生の活動をさせていただいています。

その中でスタートアップですとか、離島の振興もやっております。

今回、こういった懇話会に参加させていただいたんですけど、私自身が普段から県庁様でいく
と、例えばまち・ひと・しごと地方創生戦略会議とか、Society5.0 だったり脱炭素の取組みとか、
いろんなものに携わらせていただいています。そういった中で今回、総合的に新しい長崎の県づく
りっていうのを見直す機会に参画させていただきましたので、皆さんと意見交換を是非させてい
ただきながら良いもの作っていききたいなと思ってます。本日はよろしくお願いいたします。

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

続きまして中島様、お願いできますでしょうか。

○中島委員

皆さんこんにちは。私、面白法人カヤックの中島と申します。

おそらく今日ご参加されている方の中では多分唯一県外の企業の者かなというふうに思います。
私達面白法人カヤックで、突然面白っていう名前を出しているんですけども、社員の9割がデ
ザイナーであったり、プログラマーであったり、そのクリエイター人材が、つくる人を増やすと
いう経営理念をベースにゲームのアプリとか広告とかウェブサイト制作、最近では地域向けのコ
ミュニティ通貨、地域通貨のサービスであったり、あと移住と関係人口を創出するスマウトって
いうサービスなんかも提供させていただいて、いろんな地域の方々と約800ほどですね、地域の
方々と自治体の方々とご利用いただいているサービスに今なっております。

一方、鎌倉市内の地域の企業としても、鎌倉市の中の地域コミュニティづくりなんかも約20
年近く取り組ませていただいております。

私自身は、10年以上インターネット企業で事業責任者などをやらせていただいたんですけども、
今はこのカヤックの役割の中で内閣府であったりとか、デジ田の中での地方創生テレワー
ク関連の委員であったり、あと関係人口の委員なんかもさせてもらいながら日々勉強させてもら

っています。今回、県外の企業、そして人物として、今まで私たちが取り組んできて、いろんな方々と取り組んでいる内容なんかも皆さんにも共有させていただきながら一緒にアイデア出しをしていきたいなというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

では最後になります、矢内様お願いいたします。

○矢内委員

初めまして、長崎大学ダイバーシティ推進センターの矢内と申します。すみません、ちょっと体調崩してしまって、オンラインでの参加とさせていただきました。

私は長崎大学に一昨年、2021年の9月に着任しました。なので長崎に来てからまだ、丸1年と半年ぐらいです。今回、こういう会に参加させていただくので、どれぐらいお力になれるか、長崎について私も毎日知りながらという状況ですが、皆さんにいろいろ教えていただきながら、また、今まで取り組んできたことを活かしながら参加させていただければと思っています。

それで、長崎大学では女性研究者の支援や、それから特にLGBT当事者の支援とかダイバーシティの実現に向けての取り組みといったことをしています。教職員の研修とか、それから相談業務等々になります。

私自身の専門がいくつかあって、一つはジェンダーセクシュアリティの教育になります。大学生たちと一緒にワークショップ作ったりしながらどういうふうに自分達の身の回りのジェンダー、セクシュアリティの問題を変えていけるのかということに取り組んでいました。私、長崎に来る前は2年ぐらい福井大学で仕事をしていて、その前は東京の大学で仕事をしていました。そういう中で大学生達とそういう取り組みをしたりしていました。

もう一つ社会教育が専門でして、特に社会教育関係の職員の人達の研修をどういうふうにつけていくのかということで、実際に社会教育関係の職員さん達とかも入ってる社会教育士会っていうのの立ち上げに関わったりしながら活動しています。私自身の関心は、そのような訳でジェンダーとかセクシュアリティとかの多様性をどういうふうを実現していくのかっていうのを市民がお互いに学び合っていく、共同学習をどういうふうにつけていきながら変えていけるのかっていうことに関心があって取り組んできました。そういったことを取り組んできたことを通して皆さんと一緒にいろいろ考えていければなというふうに思っています。よろしくお願いいたします。

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

皆様ありがとうございました。大変恐縮ですけれども、ここで大石知事は所用のため退席させていただきます。

それでは議事を進めさせていただきます。最初にお配りしている資料の説明を政策企画課長の浦から行います。

●事務局（浦 政策企画課長）

政策企画課長の浦と申します。どうぞよろしく申し上げます。

お手元の資料、まず資料1ですが、懇話会の開催要綱でございます。第2条に所掌事項を記しておりますが、(1)ということで「新しい長崎県づくり」の方向性及び重点的に取り組むべき分野等に関する事項、それに(2)でございますが、県の総合計画の見直しに関する事項等を所掌しております。他は記載のとおりでございますけれども、今回、特に委員長でありますとか、座長等は設けないということで進めさせていただきたいと思っております。

続きまして資料の2をお開きください。

まず、「新しい長崎県づくり」のビジョンということで、策定の目的でございます。県内外の多方面から選ばれる「新しい長崎県づくり」を県民と一緒に実現するために、変化が著しい状況の中でございますけれども、概ね10年先の長崎県が目指すべき姿とその実現に向けて取り組む姿勢の方向性を示したうえで、県民の皆様と共有を図って、県外へも発信して長崎のPRを図りたいというふうに考えております。

2に長崎県総合計画の関係を記載しております。2021年度から5年間を期間として定めた県の総合計画というのがございます。お手元にもお配りしております。今回の「新しい長崎県づくり」において今から取り組む必要のある施策につきましても、この総合計画の一部見直しに反映させて参りたいと考えております。その下に帯グラフのようなものをつけておりますけれども、2025年度より先の次の総合計画等の検討にも今回のビジョンが繋がっていくものというふうに考えております。

3のビジョンを構成する要素について、3点ほどお示ししております。まず一つ目がビジョン全体を貫く基本的な考え方、コンセプトというのがございます。また、2点目として、こういったコンセプトを分かりやすく県民の皆様等に発信し共有するためのスローガン、キーワード等が必要かなというふうに考えております。3点目でございますが、重点分野ごとに概ね10年先の目指す姿とその実現に向けて取り組む施策の方向性というものがございます。この重点分野につきましては、現在、固まったものはございませんが、一旦、令和5年度の重点テーマとして下の点線で囲っている5点がございますので、これをベースに検討していただければというふうに考えております。重点分野のキーワードとしては①から⑤を記載しております。まず①子どもということで、②として安全・安心、③チャレンジ、④としてデジタル社会、最後⑤として選ばれるためのまちづくり、戦略的な情報発信・ブランディングということになっております。

構成の全体のイメージについては次の2ページの通りでございます。これは割愛させていただきます。3ページでございます。有識者の皆様方を前にして大変僭越ではございますけれども、4番ということで、ビジョン検討の前提として懇話会で共有しておきたいことをまとめております。

まず、世界国内の現状・潮流でございます。少々強引にまとめてみますと、将来を見通すことが困難な時代でパンデミックを契機に持続可能性や幸福を重視する新たな社会経済システムへの転換が図られようとしていると。また、感染症の影響、デジタル化の加速により、人々の意識行動に変化が生じているということではないかなというふうに考えております。それぞれ、個別に記載しております。まず1点目に書いておりますが、この15年間見ましても、先ほど知事の挨拶でもございましたが、金融危機、震災、感染症、戦争、物価高騰ですね、想定外の出来事が

次々と起こっている状況でございます。また、次のポツに書いておりますが、環境問題、貧困、不平等・格差、多様化・複雑化を増す社会状況を踏まえましても、ご承知のとおりSDGsというものが国連で採択されておりますし、また、2021年には世界経済フォーラム、WEFの総会のテーマは「グレート・リセット」ということで、従来の経済成長を中心としたシステムから人々の幸福を中心としたシステムへ転換が示唆されております。

また、ちょうど中ほどになりますが、昨年、令和4年に国の方が策定しましたデジタル田園都市国家構想基本方針というものがございます。その中の意義・目的として、例えば社会課題に直面する地方こそ、新たなデジタル技術を活用するニーズがあること、またその技術の活用によって地方活性化のブレークスルーを実現するというようなことも記載されておりますし、また、2点目に書いております、地方に住み、働きながら都会に匹敵する情報・サービスを利用にできるようになっているということもございます。次の3点目に記載ございますが、例えば、地方における仕事、暮らしの向上を通じて、「全国どこでも誰もが便利で快適に暮らせる社会」を目指す。こういう位置付けを国の方では記しているところでございます。

最後に記載しておりますが、デジタル化の進展により、働く場所・時間にとらわれない柔軟な働き方が可能になっているということで、自分のやりたい事にチャレンジできる、チャレンジしやすい環境になっているものと考えております。

次のページをご覧ください。4ページでございます。長崎県についての状況でございます。冒頭お話もありましたが、現在、長崎県の100年に一度の大きな変革ということでまちと産業に大きな変化が生じております。まちが変わるといって県内を五つの地域に分けてそれぞれ記載しておりますが、総括しますと、西九州新幹線開業をはじめ、交流人口、関係人口の拡大に繋がる大きなプロジェクトが進展しているほか、県民の方々の暮らしを支えるような様々な基盤整備が県内各地で進んでいるというものでご理解していただければと思います。また中ほどの産業が変わるところでは、海洋エネルギー関連、あるいは航空機関連、半導体関連の産業創出・育成でありますとかスタートアップ、こういったものが進められておまして、まち、産業ともそうですけれども、例えばあのスタジアムシティプロジェクトのように民間の企業の皆様の投資の活性化も大きなこうした変化のきっかけになっているものというふうに考えております。

下から3点目でございます。先ほどからお話がございます、長崎県は離島・半島が多く、全国に先駆けて人口減少・少子高齢化が進んでおります、いわゆる課題先進地ではありますが、見方を変えますと、新たなソリューションを生み出す可能性を秘めている絶好の場であるというふうに考えております。また、豊かな自然、あるいは美味しい食べ物、世界と交流しながら築いてきたような歴史や文化、あるいはそこからくるホスピタリティ溢れるような温かい人、コミュニティ。こういった他にも誇れるような資源を有しております。最後に記載しておりますが、様々な面から選ばれる長崎県のためには、情報発信のあり方が目まぐるしく変化する中で、今申し上げましたような魅力でありますとか地域資源を積極的に、あるいは戦略的に発信していくことも大事になるかというふうに考えております。

続いて、最後になります資料3でございます。懇話会において、皆様方のご意見をいただきたい内容について示しております。まず第1回、本日でございますけれども、ビジョンのコンセプトについて、目指すべき姿等の検討につなげていくために、下記のようなことについて委員それぞれのお立場からご意見をいただきたいと考えております。特にご意見をお願いしたい項目として、そもそもの話として先ほどご説明しました世界や国内、県内の潮流などのビジョン検討の前

提に対する意見や別の視点など、ご意見いただければと思っておりますし、また、先ほどお話ししました令和5年度の5本の重点テーマというのがございまして、こういったものを意識しながら、社会の動向でありますとか、委員ご自身の経験等を踏まえて、今後の社会、長崎県、あるいはご自身の生活・仕事などがどうなってほしいと考えているか、またビジョンの軸となるコンセプトについて、できればキーワードをお示しいただきながら何を重視すべきかということをご意見をいただけると大変ありがたいと思っております。その他、ご意見をいただきたい項目は掲げているとおりでございますけれども、こういった記載内容にこだわらずに、特に先ほど申し上げたご意見を願いたい項目を意識しながら、委員それぞれのお立場からご意見を願うことができると考えております。

また、今後、第2回目、第3回目として、下に記しているようなことをご意見いただく予定とさせていただきます。駆け足でしたけど、資料の説明は以上でございます。

どうぞ、ご議論、ご意見をよろしく願うしたいと思います。

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

意見交換に入りたいと思います。ここから進行の方を企画部長からさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

●浦 企画部長

企画部長の浦でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私の方で進行させていただきます。

早速、意見交換に入らせていただきたいと思っておりますけれども、できる限り皆様の方からご意見をいただきたいと思っておりますので、まず1項目は、それぞれからご意見をいただきたいと思っております。その後、またそれらの意見に対する意見交換をさらに続けられればというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

最初まず、ご意見いただきたいと思っておりますけれども、先ほど課長の方から説明いたしました、特にご意見願いたい項目、まずは10年後のビジョンを考えるにあたっての現在の社会の動向でありますとか、背景、環境、そういったところの認識、それとそれらを踏まえたところで、10年後のビジョン。ビジョンというのは、長崎県のありたい姿、なりたい姿、見られたい姿などそんなイメージになるのかなというふうに思っています。そのビジョンを考えるにあたっての何かキーワード的なのかですね、これがキーワードになるんじゃないかというようなこと。そういったところすべてを網羅していただく必要ありませんので、それぞれの立場からご意見をいただきたいと思っております。

ちょっと補足をさせていただきますと、ビジョンに対する考え方なんですけれども、当然、今現状の中で目の前にもたくさんの課題があります。県が抱えている課題があります。そういう課題を一つ一つこう解決しながら、あるいは改善しながら県政を進めていくわけですけれども、その一つ一つの目の前の課題を解決しながら辿り着く10年後というよりも、それはそれで進めていきながら、もう少しこう大きな視点といいますか、むしろ10年後にこうありたいんだという姿を示して、それを県民の皆さん方とも、あるいは市町の皆さんとも共有をして、その10年

後のビジョンを実現するために、今、現状と照らし合わせた時に、具体的にどういうクリアすべき課題なりがあるのか、どういう取り組みがそれぞれ必要なのか、そういう大きな変革の取り組み、10年後のありたい姿を実現するために、今のうちからどういうことをやっていけないといけないのかという視点でのビジョン的なものをやっぱり考える必要があるのかなというふうに思っております。ある意味、バックカスティング的な考え方もわかりませんけれども、そういう視点でご意見をいただければと思っております。

それでは、どなたからでも結構でございますので、もしご発言されたい方あれば。

では、菊森委員お願いします。

○菊森委員

公益財団法人長崎地域政策研究所の菊森です。今、特にご意見をお願いしたい項目ということで大きな3つの点をテーマに挙げていただいております、私がこの数十年を展望して、今後、10年後をどのように見ていったらいいかということ、日頃から考えているわけなんですけれども、一つの私の意見として別添のメモ「新しい長崎県づくり懇話会での私の意見」を用意させていただきました通り、これを一つのきっかけとして意見交換させていただきたいというふうには思っております。

まず、ビジョン検討の前提に対する意見とか視点ですけども、実際にこのたまたま起こったかわかりませんがコロナ感染拡大を機に社会全体が大きく変わろうとしてるんじゃないかということをおもっております。

そういう意味では何が変わるのかというと、まず一つは人口移動の様相がかなり変わってくる。それから技術自体がICTも含めて大きく変わってくる。産業構造はコロナ感染拡大がなくても大きく変わろうとしていたところに、そのDX変革の波がもう押し寄せてきています。特に造船や観光を中心とした産業構造から、長崎県内の都市が少しずつ変わってくる可能性が出てきています。

最後に、世代交代も含んで人々の価値観が変わってきているというのが、今日の当たりになっている現実だと思います。

今後10年を考えた時に、おそらく今まで引っ張ってきた約50年、第一次オイルショック以降ぐらいから考えたわけなんですけども、50年に一度の経済産業社会変革が起ころうとしているのではないかと思います。これにどのように対応していくのか、こういう中でどのように我々が生きていったらいいのかといういうことを一つ視点として持つべきではないかというふうに思ったもので、ここに書かせていただきました。

二つ目に、10年後の社会、長崎県とか、自分の生活・仕事がどうなって欲しいと思うかということなんですけども、やはり「1」に書きましたように、高齢者も若者も活躍の場がある。つまり、社会参画がきちっとできている。当然、そのようなコミュニティは崩壊しない。みんなが生き生きと暮らせる。それぞれの立場で生き生きと暮らせる社会というのが一つのあるべき姿ではないかなというふうに個人的には考えております。そのためにも、社会変革が進んで非常に効率性の高い社会に変わっていかないといけない。例えば、交通網にしても、産業構造にしても、そういった社会変革と効率性と結構ワンセットかなと思ひ、ここに書かせていただきました。

最後に三つ目として、コンセプトといった時に、今から10年ぐらいを展望することと、それ

が 10 年後の社会としていう社会を実現すべきではないかということで三つ、一つの考え方として挙げさせていただきました。

一つはやっぱりオープンイノベーションだと思います。1 人の考え、2 人の考えではなくて、いろんな人と意見交換をしながら新しい価値を生み出していくっていう考え方が商品開発でも DX でも起こってくるのではないかと思います。だから、オープンイノベーションを促進すべきじゃないかと。

二つ目に、今日の資料の中にも少し入ってましたけども、幸福な社会っていうかウェルビーイングの考え方。これデジタル田園都市国家構想のベースにもなっている考え方ですが、ウェルビーイングを実現するにはどうしたらいいかということの一つの示唆として考えるべきではないかと思えますし、最後に SDGs とか ESG 投資、これは今の時点から 10 年後を展望して、こういったものが根づいていく社会や社会づくりが重要になるのかなというふうに思いました。以上です。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございます。とりあえず一通り一巡したいと思いますので、次にご発言をご希望される方いらっしゃれば。

はい。永田委員お願いいたします。

○永田委員

菊森委員のお話は非常にわかりやすく、ビジョンの骨格を示していただいたと思っています。一方で、今後の長崎のあるべき姿を考える時に、長崎の特徴を押さえておく必要があると感じています。私はここ数年、長崎県の地域包括ケアシステムの構築状況を確認するために県が行っているヒアリングに同行させていただきまして、県内全域 21 ヶ所を回らせていただいています。そこで気づいた長崎の特徴は、地理的あるいは地政的に、そして文化的にも同じ町、圏域がないということだと感じています。同じ圏域の西彼杵半島も大村湾と大瀬戸側で環境は全く違います。県としては必ず均てん化の視点で施策を進められることが多いのですが、長崎県はやはりこの多様性をいかに大切にするか、これを強みにできるかという視点も重要だと思います。ですから、いろいろなアプローチによって多様性を活かす方向に向かうことが、長崎が他の県と違う特色を出すためには、考えていきたいところだと思います。

もう 1 点は、私の立場として「健康」というキーワードは外せません。今や「健康」という言葉は誰もが口にするので、当たり前すぎて新鮮さに欠ける言葉になっています。しかし、肉体的な健康だけではなくて、社会的な健康という意味も重要であります。社会のなかでの繋がりとか、先ほどから皆さんがおっしゃっているコミュニティ作りとか、長崎の多様な地域でいかに盛り上がるかということも健康につながると思います。今回、いろいろな分野の皆さんからも、未来のながさきの「健康」についてもアイデアが生まれることを期待しています。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございます。今、長崎の独自性みたいなお話もありましたけども、まさに冒

頭大石知事も申し上げましたけれども、10年後に長崎が他との差別化というか、他から見てもやっぱり長崎の何か魅力が発せられて、まさに県内外の方々からも選ばれる、そんな場所でありたい。その新しい長崎県を県民の皆さんと作りたいという思いが大石知事の思いであり、新しい長崎県づくりに向けた考えでありますので、そういう他との差別化という、長崎の他にない魅力をより発揮できるというような視点も持っていたいただきながら、またご意見をいただければというふうに思います。

次にご発言の方、佐々木委員お願いいたします。

○佐々木委員

公募委員の佐々木でございます。永田先生から多様性というお話がありまして、私も全く同じこと思っておりました。21市町全く違うところというのが特徴でありまして、今、多様性ということが世界的なキーワードになっている中で、もう既に長崎県はその多様性という中にどっぷり入っているというところはかなりアドバンテージがあるのではないかなというふうに思います。

私は高校を出るまで、長崎にいて対馬のことは全く知りませんでした。ただ、対馬に行ってみると、ものすごく歴史や自然も多種多様、特徴的なものがあります。もっと早くに対馬の事を知っておけばよかったと思っています。そこで、地域を子どもの頃から知る事って凄く大事だと思います。総合計画にも書いてありますが、長崎県の子ども達が「ふるさと学習」という形で自分達の住んでいる地域のことを学んでいます。私が対馬にいたこの10年で、子どもたちは、ふるさと学習によってものすごく自分達の住んでいる地域のことを学んでいるなと感じています。

対馬の言葉で面白くないっていうのを「さえん」と言うのですけれども、私が対馬に来た時すぐは、よく対馬の人達に「対馬はさえんところなのになぜ対馬に来たの?」「面白くもないところなのになぜ来たの。」ってよく言われました。でも、知れば知るほどいろんなことが出てくるんですね。子どもたちも一緒に、少しずつふるさと学習をすることでそのことに気づいたんですね。だからものすごく今の子ども達って対馬、ふるさとのことについて調べているし愛着もあります。その結果、大人たちも、地域の魅力に気付き始めていると思います。

ふるさと学習ではないですが、4歳から中学生まで対馬で過ごしたミュージシャン MISIA さんがいらっしゃいます。最近インタビューの中で、学校での平和学習がすごく心に残っているとおっしゃっていました。彼女が、折に触れて平和について発信する姿は、皆さんご承知の通りです。原爆遺構などが近くある長崎市と対馬では、教育の機会に差があるかと思いますが、長崎県という特別な場所での学び、その後の行動に大きく影響するのだという事を感じたところで、子どもたちに地域について伝えるという事は、短期的には結果が分かりにくいけれど、長期的に見れば大きな収穫があるのではないのでしょうか。

長崎県の10年後どうしたらいいか。どんどん人口が減ってきます。自分達の所が一番だという思いが21市町あると思います。今まで「私の街が一番」ということで長崎県の中でも競争をしてやってきたと思うんですね。それを今度は競争ではなくて協業、協働する、足りないものを補い合う。お互いを理解し合う。お互いの地域にこんなものがあるよ、こういうものがあるよっていうことを長崎県全体の皆さんがわかるというのがまず大切なんではないかな。多様性を認めつつですね。やっぱりいろんなアプローチでそこを繋いでいくということが一つ大事ではないかなと思います。

先ほど知事が「未来への投資」をというキーワードを出されまして、「どうし」の「し」って何だったっけなと思ひながら漢字を思い浮かべて、「志」という字を思いました。資本を投資するというよりも、いろんな人に志を投資する。志をいろんな地域の人達に出していく。県の人達の役割ってというのはそこだと思ひますね。それぞれの自治体の人達はそれぞれの自治体のことを、その全体を見る県の人達ってというのはその地域のことを発展させるというよりも、例えばここに彼杵茶ありますけれども、彼杵茶と対馬の何かを組み合わせたら何か面白いのができるんじゃないかと。ここの地域にこういうのがあるけど、これを他と繋いだらどうなのとかっていうところを具体的にこう出して、県の皆さんが蓄積したデータや肌感をいろんなところの地域の人達と結びつけるというのはこの10年に必要なことではないかな。

長崎というのは対馬から五島まで300キロぐらいあって、海も入れるともう広大な面積があるんですね。その中でどう生きていくかっていうところは、やっぱり人と人をつなぐところっていうのが重要じゃないかなと考えました。以上です。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございます。地域をつなぐという視点でのご発言をいただきました。ありがとうございます。

他にどなたかいらっしゃいますでしょうか。はい、下川委員お願いいたします。

○下川委員

10年後ということで、ちょっと今の現実から考えると少し3年後ぐらいで終わっちゃうかと思ひますので、少し発想をとばしていきたいと思ひますけど。

仮定として、結構今仕事がAIに取って代わられるんじゃないかとかいろいろあると言われていすけれども、もしほとんどの仕事がもうAIになっちゃったと。その時に何が残るかなんて考えるとやっぱりいろいろあるとは思ひますけども、一つはエンターテイナーの観光であったりですとか、グルメであったり体験であったりとかですね。この部分は絶対残るだろうと。長崎はもちろん観光県でもありますけれども、より魅力を発信するためには、何か福岡とか東京とかそういうような何かショッピングモールがいっぱいあるとか、そういうものはもうアジアの地方都市とかいろいろなところに、長崎よりもハード的にはなんかイケてるみたいな所がいっぱいあるので、そういうところじゃなくて、やっぱりその自然ですとか、あとは体験とかですね、大川さんがやってるような海女さんの体験とかですね。そういうのもすごく面白いと思ひますよね。そういういろんな活動とかをよりPRして発信できるような長崎県になればいいかなというふうなところを思ひます。それは、先ほど大石知事がおっしゃられましたような今既にあるもので、まだ我々が全然気づいてないような魅力っていうのもきっとあると思ひます。

私に、日本好きなタイの友人がいるんですけど、日本全国回ると、「どこ行くの。福岡とか東京とか。」と聞くと、「佐賀に行きたい。行けたら長崎にも行くね。」みたいなこと言われちゃったんですけど、佐賀に何しに行くかという、タイで人気だということもあるんですけど、やっぱり日本の原体験、村的なところを見たいという。そういうところをもう1回、10年後に向けて見直してみるといいのかなというふうに思ひます。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございます。改めて今の長崎の強みであるとか、長崎しかないものを積極的に磨き上げ発信していくことで、他にはない長崎の魅力が 10 年後により際立っているというか、そこから選ばれていくというか、そういうご発言だったかなと思います。ありがとうございます。

はい。入江委員お願いします。

○入江委員

佐世保高専の入江です。私は、先ほど言いましたようにアントレプレナーシップとかそういったところで呼ばれているので、そういった軸でお話しさせていただきたいと思うんですけども、やっぱり人口減少も日本全体が抱えている課題なので、急に今からすごく子どもが生まれてるのはなかなかあんまり想像できないんですけども。となると結局、今、技能実習の方とかいろんな海外から来ていただいていますけれども、やっぱり海外から高度人材をもっともっと迎え入れていく必要があるんじゃないかなと思います。

例えば、私、海外に拠点がありますけれども、上海とバンコクはマーケットとして見て進出しています。マニラは人材でいってます。人口構成図が綺麗な三角形、要するに下の若い層が分厚いという人口構成図が三角形になってまして、日本は逆三角形にちょっと団塊の世代とかギザギザになっていますけれども、基本的にしりすぼみな人口構成図になっているというのは皆さんご存知の通りだと思います。

マニラに、例えば5人のエンジニアが欲しいと。福岡で会社やってて、求人出してもなかなかうちのような50人ぐらいの規模の会社だと来てくれないんですね。IT人材の取り合いになっています。給与が東京の方が高いのでみんな東京に行ってしまう。ですので、マニラに出したのはやっぱりエンジニアを探しに行ってます。うちの法人の日本の仕事をフィリピンの弊社の法人でやってもらってると。その時に大事なはず言葉、日本語をしゃべれるエンジンって探すともたパイが少なくなるので、弊社は英語と中国語はあらかじめ言葉を合わせてやっています。それで、例えばフィリピンで5人エンジニアが欲しいってやると大体60人ぐらい応募があります。フィリピン大学とか。うち結構給与体系高いので募集してくれます。そうすると優秀なエンジニアが集まってきて仕事ができる。

何かそういった発想で、長崎もなんかそういう優秀な方々をどんどん受け入れていって、例えばそういう特区なのかちょっとどういうやり方があるのか私はわかりませんがそういう形でされると。私が思うのは、特に九州ってアジアのゲートウェイって言われたりしますが、なかなかマインドは東京の人の方が全然心理的マインドは海外に近くて、田舎に行けば行くほどなんかちょっとやっぱり外国人ちょっとねみたいな、そういうこと言っていないんですけど、あるとは思いますが。

なので、どんどん発展してる都市、中国の深センっていうところはIoTとかで非常に、私は人工知能が専門ですけど、データマイニング専門ですけども、そういったところでも3周ぐらい先に行ってます。そこはもう中国人だけじゃなくて欧米人も非常にスタートアップしにやっています。やはり、そういった方々が来やすいような環境、福岡市の外国人のスタートアップピ

ザとか出したりしてますけれども、それよりももっと強い施策を打ち出していくと外国の優秀な人が集まる。もともと出島という、そういう文化があるところだと思うので、そういったところでやられればいいんじゃないか。人が少ないという問題は多分一気に解決するんじゃないかなと感じます。

あともう一つスタートアップ。私も起業してやってますけれども、なかなか長崎でやろうとすると非常に難しいと思います。市場が少ない。ゲームのウマ娘って皆さんご存知ですかね。そのCygamesという会社は本校の卒業生が社長をやってます。また、もう1個上場しているソーシャルゲームのアカツキという会社があって、そこも本校の卒業生が今代表をやってます。卒業して、やっぱりみんな東京に出てしまう。それはしょうがないと思うんですけども、何かそういうその1回出ても、こっちのシステムを作ってもらうとか何かそういった取り組みと、あとゼロからイチを作るのは大変なので、二次創業、既にある企業さんが二次創業で新しいことをやっていくとか、あとM&Aとかですね、なんかそういったのをもうちょっと促していかれると、やっぱりゼロイチって非常に難しい。私も30年会社経営してきてますけど、周りはやっぱりつぶれた会社が多いです。ありがたいことに30年間生き残ってきてますけれども、何かそういったところを、もうちょっと柔軟に。ゼロイチをやろうとしているのは正直長崎だけじゃなくていろんなもうこの都市もやろうとしているので、長崎はちょっと目線を変えてやってみられると良いんじゃないかなと思いますし、そういったところは村上さんもCO-DEJIMAとかでやられてるので、多分そこら辺はご意見あられると思うんで、村上さんにはいい。ありがとうございます。いや、すみません。

○村上委員

全然違うこと考えてた。もちろんその10年後だったりとか、大きく見る視点というのは大事なかなと思っています。長崎の魅力ある観光資源であったり、地域にあるものもすごくいいなと思います。食べ物も美味しいですって言いますけれども、視点を今の若い人達、子ども達、またこれから生まれてくる子ども達から見たら、やっぱりラウンドワンが欲しいんですとかって言うんです。僕はそれもすごく大事なかなと思っています。ただラウンドワンを実際つくれるかっていうとそれはまた別の問題で。私もまだ若輩なんですけれども自分で起業して今やっています。やはり大きい会社とか資金とか十分ではないのですけれども、じゃあどうするか。

スタートアップの話が出ましたので、起業家さん達に何を言うかという、ないものをねだっても仕方ないっていつも思っていて、じゃあ僕達の武器って何だろうと、起業家の武器って何だろうと、やっぱり知恵と工夫かなと思っています。ですので、ラウンドワンは難しい。だったら、知恵と工夫でラウンドワンに代わる面白いものを、多少のお金は必要だったりするかもしれないんですけども、そういったものを一生懸命一緒にみんなで大人も考えて、じゃあどういったものができるかとかを、要は目の前のことも考えていった方がいいのかなと。

実は、僕は課題って言葉がすごく嫌いなんです。すみません。課題って自分ではあんまり使わないようにしているんですけども、それって大石知事も言われたように考え次第だと思っていて、メリットがデメリットになることもありますし、今までのよかったことが、例えば産業が変わって今まで当然のようにあった企業が突然たまたまきょとかなくなったりする時代です。

その逆もあると思っていて、それが先ほど言われた、僕も長崎県をまわっている時に、すごくいろんな地域にこれだけの人、コミュニティがあるのは何でだろうと。僕は福岡なんですけれど

も、福岡は主要都市ということで交通の便がいいので集まりやすいんだなと。長崎は交通の便が正直いいとはいえないからこそ、各地域でやろうかという人が今いらっしゃるといのが強みかと。そういった知恵と工夫で何とかできないかなというのが。

こんな話で大丈夫ですか。カメラがあると、まともなと言わなきゃいけないのかなみたいな感じが。大丈夫ですかね。全然スタートアップのこと言っていないんですけど。

そういったことを経験すると、さっき言ったように福岡も出ていくんですよ、男の子とかほとんど出ていくんですけども、僕達が福岡でやってきたことも今の話とあんまり変わらなくて、知恵と工夫で地元をどう楽しく、まず自分達が楽しくなる方法をやろうと言って続けているうちに、楽しいんじゃないかみたいなのが広がって、徐々に出身者であったり全国の出身者でない方で愛を感じてくださっている方というところも関わりがあっけてきているのかなと。そういった可能性はいっぱい長崎にもあると思っているので、そういったことがあるといいのかなというのとはなんとなく思っているんですけども、まだちょっとそこら辺の具体的な話はその先になろうかと思っています。そこら辺はまた話させてもらえたらなと思っています。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございます。先ほどの入江委員のお話だと、10年後、外国人材、ある意味長崎にも内外から多くの人が集まってきてそこで起業も仕事も含めて何かこう活発に元気に活躍してるような場面でできていけばいいのかなというところが一つのイメージ、姿としてそういうところもあると思いますし、ある意味、そういうのが日常の風景の中で生まれてきてるっていう姿かなというのがありますし、今の村上委員の話とか、永田委員のお話にも通じると思いますが、やっぱり長崎は課題が多いっていうのは皆様よく言われるんですけど、一方で、逆にそれがある意味、今の多様性の時代からいくと課題が課題でない、むしろ強みとして逆転の発想で活かしていけて、そのいろんな長崎の多様性がうまく磨かれれば、逆にそれが長崎の特徴となって、ある意味10年後、他とは違う楽しい長崎県が何か生まれてくる可能性もあるのかなというふうになんてヒントとして、ありがとうございました。

すみません、カヤックの中島委員、手を挙げていただいていますのでよろしくお願いいたします。

○中島委員

ありがとうございます。機会いただきまして。私の方から3点お話ししたいなと思います。

まず1点目なんですけれども、この資料の中にある、「地方の『不便・不安・不利』ってこの三つの不を解消する」という記載がデジ田のところにも記載があったんですけども、不安、不便、不利、この不を完全に無くすことってやはり難しいと思っています。減らすことはできるんですけど、完全に無くすことは難しい。じゃあ無くすことができないところを何でリカバーするのかっていう時に、やはり寛容な社会をどう作っていくかっていうところが重要なんじゃないかなと私は考えています。これは女性が活躍しやすい場を作るとか、県内の若い人達が出て行ってもまた戻ってこれるような場を作る。もしくは県内の人達が過ごしやすい、もしくは県外の方々が入ってきやすい。また新しい技術を長崎県で実験していく、実行していきやすいというところも含めて、いかに寛容な社会をつくれるかってところが重要なんじゃないかなと思いまし

て。是非、寛容とは何なのかみたいなことも皆さんと今後またお話していけたらいい、嬉しいなというふうには思っているんですけども、何かこのテーマっていうのは多分日本全体の問題かなというふうに思うんですが、ここを長崎県中心にスタートしていけると、一つ国に対しても発信できるチャレンジになるんじゃないかなというふうに思っているところです。これが一つ目です。

二つ目が、やはり地域外からのリソースに頼るだけじゃなくて、やはり地域内の方々が中心に関わる事業であったり取り組みにしていくべきだなというふうに思います。今日ご参加されてる先生方も皆さん、アカデミックな領域をご担当されてる方、教育にかかわられてる方たくさんいらっしゃると思うんですけども、やはり若い子ども達の世代がいかに地域外の企業の方々と接触し、長崎にいてことでそういう流れができる、もしくは今のインターネットのサービスを活用することで県内だけでなく県外、世界と繋がって取り組んでいけるっていうことを県内の方々がどう実現できるか。そのために地域の外の人達をどう使うかっていう、その手法を県内の方々が中心にかかわれるということを考えていくってことをやれたらいいなというふうに思いました。

三つ目なんですけれども、先ほどどなたかもおっしゃっていただいたと思うんですが、やはりESGの投資であったりとか、経済的な指標だけではなく社会的なインパクトの部分っていうのは非常に今後、特に地域こそ注目していくところだなというふうに私も思っています。すぐには難しいかもしれないんですが、やはり社会的インパクトのあるものの可視化っていうところにチャレンジされるのはどうかなというふうに思ってます。やはり指標化することって、みんなが目指しやすくなる。評価することによって10年、20年の計画を継続的にお金を投資して実行していくことができるということであったり、長崎県としてどんな指標を持つのかっていうことを県内の皆さんで共有して、県内にお住まいの方が大事にしてることはこういう指標なんだっていうことのその指標に個性があってもいいんじゃないかなというふうに思いました。例えば、私が今暮らしている鎌倉市ですと、ごみの分別が非常に細かく、ごみの廃棄みたいなことをどれだけ自分達が少なくできるかっていうのは、引っ越してくるとそれをすごくみんなが大事にしている、それが何かこうアイデンティティーのようなふうになってるところもあって、そういう暮らしがしたい人達がどんどん集まってくるっていうところもあるので。フォーカスしてることは何かということ、この可視化していくことで、メッセージにしてみんなで共有できるようになるっていうことも、長いチャレンジの中では大事なのかなっていうふうに思いました。すみません。3点以上でございます。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございます。一つ目に、まず一つキーワードとして寛容という言葉をいただきました。よそから受け入れる、あるいはスタートアップも含めてですね、そういうチャレンジをいかに長崎の地で増やしていくかっていう、そこを受け入れていく寛容さってのが一つのキーワードとしてあったのかなというふうに。昔、出島があって長崎がまさにそういう役割を果たしていたような、そんなイメージが一つありました。あとは地域内の人達の活躍、そこをいかに外部の人達との繋がりをうまく作っていきながら、地域内の人達が活躍できるかっていう話。最後に社会的インパクトの可視化というお話がありました。確かに、まさにその通りで、10年後の姿をとにかくわかり易く示して、ありがたい姿を県民の皆さんと共有して、そのためにどんなこと

をそれぞれが頑張っていけばいいのか、その少し具体的な指標というのあれば、よりわかりやすく皆さんと一緒に一つの方角に取り組んでいけるのかなっていう、そういう貴重なご意見いただいたと思います。ありがとうございました。

○中島委員

まとめてくださり、ありがとうございます。

●浦 企画部長

では、山本委員お願いします。

○山本委員

私が考えている仕組みは 10 年もかからないで実現できそうだなと思いながら考えていたのですが、10 年後は人口減少により今よりもっと不便になる社会の中で、不自由を感じない暮らしができていたらいいなと思いました。そのために、今からいろんなところを整えていかなきゃいけないと思うのですが、すぐにでもできそうなことはやはりインターネット関係の整備ではないでしょうか。長崎県は離島も多いので、インターネットの通信網のハード面をまずきちり整備することが大事だと思います。それが済んだら今度はソフト面で、一人一人が使いこなせないといけないと思うのです。高齢者の方とかは、やりたくても先に諦めてしまっていたりするので、そういう方々も含めてインターネットは自在に操れるくらいのレベルまで使えるようになっていければいいなと思っています。

あと、10 年後、不自由を感じない暮らしの実現には、やはりコミュニティをきちり維持できていないといけないと思うので、それも整えていく必要があると思っています。

他には、他県の方々から魅力的に感じてもらうとかの交流人口に繋がる方策として、メタバースの活用があると考えています。何に惹かれるかなと思った時に、例えば私個人だとしたら、長崎県内には教会群があって、わざわざそこまで行かないと見られないよりも、まずちょっと興味を惹かれた時にメタバース内でその教会を訪れてみるとか、感覚的な体験ができると楽しいと思います。その先にやっぱり現地まで行ってみたいという興味に繋がればいいのかなんて思ったりしているので、そういう長崎にしかない資源をメタバースの中で実現できるような状況になればいいなと感じています。

観光でいうと、最近ちょっと驚いたのが、本州からの修学旅行ですが、私の昔のイメージでは、長崎県に修学旅行、長崎県（点）だけを見て帰るっていう感覚だったのですが、最近は、九州という大きな塊（面）で見ているらしく、例えば長崎市に平和学習で来て、泊まるのは島原に泊まって、そのままフェリーで熊本に行って熊本城を見て帰るとか、かなり広域に動かれるのです。それで、島原に泊まるから島原の観光もするのかと思ったら、ホテルの中だけなのです。そうなってくると、修学旅行生にいろんなところを見てもらうっていうのはやはり学習、平和学習と関係ある長崎市とかそういうピンポイントで、学校が好むようなテーマがある地域しか今後は見込めなくなってくるのかなという感じがしています。それならば大人の個人観光客向けのコンテンツを増やしたほうがいいと思うのです。今の修学旅行がそういう状態っていうことは旅行会社

がそういうパッケージを作って、学校に売り込んでいると思うので、今後、大人の団体旅行もそういう感じにシフトしていくのではないかと考えているのです。なので、個人で旅行される方が満足いくような仕組みっていうのが、今後の長崎県の観光には必要なのではないかと感じています。

各分野でちょっとずつ整えていって、10年後に地域住民が不自由を感じずに過ごせるような社会っていうか長崎県ができ上がっていただければいいなと思っています。以上です。

●浦 企画部長

ありがとうございます。不自由を感じない暮らしというのは、また一つのキーワードというふうに思います。そのためにいわゆるデジタルの活用というのが一つあるんだと思いますし、修学旅行、観光についても、長崎をいかに差別化できるかっていうところはまだまだ工夫の余地はあるんだというふうに思いますので、そういうところを10年後に、どのようによそから人を呼び込む土地を作るかっていうのは考えないといけないところかなと。

矢内委員が手を挙げていらっしゃると思いますので、矢内委員お願いいたします。

○矢内委員

ありがとうございます。皆さんの議論を伺いながら考えたことが幾つかあるんですけど。

一つは、多様性のことに関してなんですが、私長崎に一昨年、2021年7月に長崎大学の面接のために来た時にもうすごびっくりしたんです。なんかもう、バーッといろんな情報が入ってくる感じで、その前が福井県の北陸の地域にいたのもうそれとは全然違う、町もダイナミックだし、路面電車も走ってるし、なんかもうこの路面電車が走ってるこの道路沿いにいろんなものがある、わーっとすごびっくりしたのを覚えています。そのあとここに住み始めながら、本当にこの地域がいろんな文化がやってきて、ここにその文化が根付いてっていうふうにして地域が育ってきた、作られてきたっていうのをいろんなところで見て感動してるというか、驚きながら感動しているわけです。皆さんもおっしゃったように長崎っていうのは、すごく多様性っていうのが目に見える地域だなと思います。だけれども一方で、その多様性って、ちょっと厳しい言い方をすれば、どこも多様性なんだと思うんです。多様性がない地域はどこもないと思っていて、ただその多様性を一人一人が本当にそれを大事にし合っているのか、それを生かし合っているのか、お互いに学び合っているのかということに関しては、少し考えていかなければいけないのではないかとこのように思います。例えば、長崎県の男女平等の度合いに関しては、かなり全国的にも厳しい状況にあるわけです。ですので、長崎県の多様性っていうのは本当に歴史的にも、それから地形的にも豊かに作られてきて、他の地域の多様性とは全然違う多様性の姿が長崎県にはあるのかなと。それをもっとそこから互いに学び合うとか、もっと自分達が学び合うということが大事になってくるのではないのかなというふうに思います。その時に、自分達の中にある例えば男っていうのはこういうものだとか、女っていうのはこういうものだとか、あるいは長崎ってこういうものだっていうふうに自分達の中で思って決めつけてしまっている考え方とか、それから言葉とか、人との関係のあり方っていうのを徹底的に変えていく必要はあるのではないかなというふうに思います。

10年先というのを考えた時に、先ほど佐々木委員がおっしゃってたと思いますけど、今若者達はふるさと学習をすごく一生懸命やってらっしゃると。ふるさと学習だけではなくて、SDGsについてもすごくよく勉強してるんじゃないかなと思います。つい先週、この間の土曜日も、県内の高校生が学校の探求の授業の中でSDGsの男女平等のところについて勉強してるので話を聞かせて欲しいっていうふうにして、センターの方に来てくれました。すごく本当に自分達の日常の中にあるいろんな違和感っていうのを、その生徒さん達というのは敏感に感じ取っていて、それを友達と一緒に共同学習の中で、話し合い学習の中で何が問題なのかっていうのを明らかにしようとしてたり、じゃあ自分達に何ができるのかっていうのをすごく真摯に考えてらっしゃったんですね。今のその15歳とかの子ども達が既になんか敏感に人権や多様性や平和とかさういうことの問題を学習しているということは、かなり大人達の方が焦らなければいけないのではないかなというふうに私は思っています。この今の15歳とか18歳の若者達が10年先になって長崎にいる時に、やっぱりここであの時自分達が学んできたことっていうのをもっとより良くしていけるよねと思うのか、それともやっぱりこの地域は変わらないねと言って諦めてしまうのか、結構それは大きな問題なのではないかなというふうに私は思っています。その誰もが安心して安全でここで生きていけることのための根本のところやっぱりそうした多様性の尊重とか人権の問題とか、それからどういうふうに私達一人一人が平和を作っていくことができるかとか、そういうことの価値観というものが必ず土台にあるのではないかなというふうに思います。そのことを私は、10年先の若者達に向けて大人達が今変わっていく姿というのを見せていけないと、若者達にとっては希望がないのではないかなと思います。変わった姿だけではなくて、変わっていくという姿っていうのを伝えていくことが大事なのではないかなというふうに思っています。

あともう一つ、インターネットとかそういったものの活用の重要性も感じていますが、例えば、私は東日本大震災の時にボランティア活動をしたことがきっかけで、その頃は文学部の仏文にいたんですけど、あれこれやってるうちに、やりたいことは文学じゃやっぱり無理ねと思って教育の方に変えたんですね。その学生のボランティアを立ち上げるのをやっていた時に、震災でネットワークを作っていくと聞けなかったんで、みんなでいろいろオンラインのツールをかなり活用して使ってやってきたんです。オンラインは確かに便利になるというだけではなくて、どういうふうに仲間と繋がるのかということなんじゃないかなというふうに思うんですね。今回のコロナの中でもオンラインのツールがこれだけ使えるようになってきたっていうのは、今日も私が体調悪くても参加できているのは、そういうツールが使えるようになって本当に便利になったなと思います。便利になったというよりはどういう時でも人と繋がることができるということかなと思います。もちろん、それは反面でいろんな繋がりがたくない時に繋がるとか、いろんな人がよく言っているのは会議が増えたとか、そういう言葉もよく聞きますけれども。だけれども何て言うのかな。繋がりがなくなかったとしても孤独ではないということは大事なんじゃないかなと思うんですね。誰かが孤独になってしまうことを生み出さないツールとして、インターネットが活用されていくということが人の健康な暮らしを支えていくことの助けになるのではないかなというふうに思いました。以上です。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございました。まず多様性についてお触れいただきました。どこにも多様性

がある中で、長崎にある多様性というのは何なのかというところからの検討も必要だろうというご指摘があったと思います。また、10年後の姿として、今学ぶ子ども達が、先ほどご意見もありましたけれども、長崎で楽しく誇りを持ってられる姿、そういう姿を描くというのは我々の役割としてあるのかなというふうに思いますので、そのために何が必要かというのは考えないといけないなというふうに思います。

また、オンラインで孤独を感じないというようなお言葉もありました。そのためのツールになるのかなというご意見でございました。ありがとうございました。

まだご発言いただけていない方もいらっしゃると思いますが、1時間以上経過しましたので、今から5分ほど休憩を取らせていただいて、その後にご発言いただきたいと思います。

－ 休 憩 －

●浦 企画部長

引き続き委員の皆様からご発言をいただきたいと思います。オンラインで参加されています艶島委員、ご発言大丈夫ですか。

○艶島委員

皆さん、多方面からプロの方が来られていて多様な意見が出ていると思うんですけど、私の場合、日頃から県の皆さんと意見交換をさせていただいて、将来のビジョンとか、非常に模索している状態です。私の分野で発言することはないんですけど、やっぱり今回のテーマというのである、5年後だったり10年後だったりというのを目指した施策を検討していこうという中で、先般いただいた参考資料に注目させていただいたんですけど、たくさんの方の施策が書いてると思っています。県の皆さんも、今日のご意見なんか普段から非常に耳を傾けられてご検討しているんだろうなというふうに思ってます。その中で苦労して今日みたいにさらなる意見を聞かれてるんだろうと思ってます。非常に難しい意見というか、県の皆さんに耳障りなことかもしれないんですけど、そういった中でいろんなことを展開していく中で、なかなか地方はどこも一緒かもしれないですが、進まないのはなぜだろうというのがあるんです。

今回のテーマ、その5年後10年後の長期戦での目線で展開していく施策をどうやっていこうかということで、将来を見据えてとお考えでしょうが、自治体の皆さんがいろんな施策をやっていく中で、単年度予算の中で、プロポーザルやったりしながらいろんな人達と関わり合いながら一緒にオープンイノベーションみたいな形でやられていると思うんです。このスピード社会において逆走するかもしれないですけど、単年度予算じゃなくて5年後10年後のゴールを目指した、単年度予算じゃなくて本当にしっかり据えた施策というのを、改めて本当の重点施策というものを、そういったものを展開されてはどうかと思っています。多分、いろんな意見の中で子どもだったり若者だったり女性だったり、医療、福祉、介護、防災、教育、新産業とか、スタートアップとかいろいろあると思います。地域課題というのと、その金融リテラシーが長崎低いよとか、キャッシュレスも下から2番目だとか、本当にいろんな問題はいっぱいあると思うんですけど、その中で皆さんの意見を聞きながら、集約しながら、中長期目線での展開、予算の請求は非常に難し

と思うのですが、そういったものの展開も考えていただきながら進めなきゃいけないかなと思ってます。すみません。ちょっとこんな抽象的な意見で申し訳ないです。以上です。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございます。まさに今おっしゃられたように 10 年後の姿をしっかりとわかりやすく示して行って、そこに向かって県、県だけではなくて県内の市町であったり、民間の方も含めて、あるいは大学も含めてそれぞれがどんなことをやっていかないといけないかというのをしっかりと認識できるような、そういう羅針盤的なものを県としては何か示す必要があるんだろうなと思います。その中で具体的な予算もついてくるのかなというふうに思っています。ありがとうございます。

では、村上委員。

○村上委員

全然意見じゃなくて、僕が不勉強で申し訳ないので、皆さんのこれからの意見の中でも、もし教えてもらえたらなと思ったんですけども。菊森さんの意見メモの3番の「ビジョンの軸となるコンセプトとして何を重視すべきと考えるか」に記載されているウェルビーイングが、僕もよく聞くんですけどもちょっとよくわかってなくて、先ほどカヤックの中島さんの指標とか目標とか、何を目指すべきかというのはすごく理解したうえでやっぱりこう考えなきゃいけないとなった時に、このウェルビーイングをどういうふうに考えるといいのかというのが非常にちょっと僕にはわかってなくて、そこら辺をちょっとご存知の方とかいらっしゃれば、踏まえてお話いただけるとありがたいなとは思っています。

○永田委員

今言われた「ウェルビーイング」とか「幸せ」を尺度で示して比較することは容易ではありません。「健康」の尺度については、医学的な視点で数値や画像など、分かりやすいもので比較することが可能です。最近はQOL（クオリティー・オブ・ライフ）などのように、病気の治癒だけではなく患者さんが生活に戻り、どうやって暮らすかというところまで評価に加えることを目指しています。しかし、その先の「幸せ」や「人生の満足度」など主観的なものとなると簡単に比較することができません。長崎県では3年に一度の健康生活習慣調査が行われています。その中で、各市町で健康に対する不安感を比べると、予想されるように離島では軒並み高いのですが、ただひとつ小値賀町だけが逆に低いという結果なのです。その理由はいろいろ考えられるのですが、そのようなものの中にも健康だけじゃなく、ウェルビーイングの指標になるものが隠されているのではないかと、私は関心を持っています。長崎ならではの「ウェルビーイング」とか「幸せ」を求めていくことができないでしょうか。

○村上委員

大川委員が先ほど手を挙げられていたところをすみません。まさに離島の話とかも聞かせてもらえると。

●浦 企画部長

大川委員、話を伺えますか。

○大川委員

ありがとうございます。すみません、ちょっと本当に私には結構難しい言葉が、いろいろ勉強不足なんですけど、それにちょっと頭が追いついてない部分もあったりはするんですけど。

多様性というのは、自分の5歳の娘や近所に子ども達がいる中で、本当にもう既に持ち合わせていて、自分の中にもですね。ただ、それをじゃあどう発揮していくかってなった時に、邪魔しないことだったりとか、もう元々持っているものだと思うので、それを押さえつけなかったりとか認めるとか、これ簡単になかなかできないことなんですけど、それこそ今、小学校区という範囲の中で、島の中で、他のなんて言うんですか、一緒に活動してるメンバーではもうそういう気持ちを持ち合わせて子ども達と一緒にいろんなワークショップをしたりとか、学校でも家でもない居場所づくりとかをしてるんですけど。本当に何だろう。10年後ということも大事だけど、何ていうんですかね。本当にいつどうなるかわからないなというのを感じてて。台風もどんどん離島に住んでたらひどくなって、去年もその9月の台風の時にうちの食堂の屋根が壊れたりとか、本当にひどくなって、いつどうなるか、コロナもそうですけど。でも、そういう中でも、いつどうなるかわからないからこそ今やらなきゃいけないかったり、要はお金とかそういう経済もそうですけど、幸せに感じるのがやっぱり一番大事。大丈夫、何かこう生きていける、なんかそれでも楽しい、壱岐って楽しいみたいに日々思えることがやっぱりすごい大事だなというのを、壱岐に来て、離島に住んでて本当に感じるんですよ。自分の生活が本当にいろんなことに直結してるというのも、離島に住んでると、食べ物もそうですけど、その不便・不利・不安にすごく何か違和感を感じてて、これ逆でしょって私は思ってて。食材もすぐ買えるということよりも自分で作るとか、自分で手に入れるっていう力を、何かそういう方向に考えを持てるような、やっぱり環境というか、しやすい環境にじゃあどうやって整えていこうかというふうに私はやっぱり考えたいなと思っていて。その方が面白いからだと思うんですけど。何か用意しすぎないこともやっぱり大事だなって思っていて。そして邪魔しない。これからの子ども達とか若い世代の邪魔をしないというか、すごい大事だなというか、それが多様性に繋がるのかなと日々思っていて。

本当に詳しい知識とかはないんですけど、そういう感覚で、10年前に海女になるために壱岐に来て、そこから離島でも海女さんだけじゃ生活できない、漁業だけじゃ生活できないことが各地方でもあると思うんですけど、資源を生かすために宿を始めて。目の前で食べてもらう楽しみがあったりとか、そこからこの町は全然壱岐の中でも観光地じゃないけど、どうやったら人が寄ってくれるかなっていう立寄り場で食堂と子ども達の放課後寄れるフリースペースというのをやってるんですけど。それで一気に人が集まってきたというよりは、徐々に徐々にいろんな考えの人が集まってきてくださってきて。移住ですよ。中には、中国の上海に拠点を持ってアーティストさん。日本では壱岐で拠点を持ちたい。お子さんは中国語も英語も日本語も6歳なんですけどできていってる。それと一緒に遊ぶ自分の娘とか、そういう小さい繋がりから、もう国際交流ができるんだなって思っていて。なので、本当に高齢者ばかりの商店街だったんですけど、そこにいろんな価値観の人がちょっとずつ集まってきて、いずれはもうちょっとこう、いろんな海外の方とかも、日本、海外からじゃなくても国内にいる国際結婚されてる方とかたくさんいる

ので、ちょっとずつ集まってきて、そこで国際交流もできればなっているのと。

ちょっと話はずれるかもしれないんですけど、離島に住んでても、不便、不安、不利と感じてない、感じない精神というか生き方もちゃんとあって、やっぱりそこはしっかり見せていきたいなと思うし、離島に住みながらでも、当該の希望の中学校、高校、大学とかに行けて、週末は家族で過ごすみたいな生活もできたらいいのかなって。船代とかちょっと応援してもらいたい部分があるんですけど、結構進学で島外に出る方も多し、就職でも多いんですけど。仕事も、進学も、離島に住みながら通えて、ちゃんと島の暮らしもできるっていう。何かこう、長崎は離島が多いので、インターネットとかそういうのも活用しつつ、拠点は離島というところで暮らせたらいかなって思って。なんかそういうのを町のメンバー達ともよく話してるんですけど。また何かあれば、すみません、発言させてください。ありがとうございます。

●浦 企画部長

はい。ありがとうございました。離島ならではの良さといいますか、個性を生かすという意味ではそれも一つの多様なものかもしれませんし、先ほど邪魔しないというお言葉がありました。やっぱりその子ども達の可能性を伸ばしていくというか、子ども達が長崎の地でも可能性を感じられるような、そんな長崎県である、あるいは離島であるという。暮らし方も含めて、何かそういう姿を作っていくっていうのは、非常にご意見として、ちょっと刺さった感じがいたしました。ありがとうございます。

○大川委員

すみません、ちょっと補足なんですけど、それをお話したのは、現状が自然環境とかいい中でも、そういう教育環境ではないというところが大きいです。教育環境ではないというか、保育園とかもそうなんですけど、ほとんど野外に出ないとか、やっぱり現状そういうことがあるんですよ。離島というか、自分が住んでる離島では。やっぱりもうちょっと環境を生かした子育てができるだろうなと思って可能性も感じてます。

●浦 企画部長

あと先ほど言われたコミュニティといいますか繋がる場を作っていくというのは非常にこれから大事なんだろうなというのも改めて感じたところです。ありがとうございます。

では、安部委員お願いいたします。

○安部委員

今回のお題には、100年に一度の変革の時期にあるといわれる長崎には、色々な課題はあるけれども、そんな中に光明を見出したいという願いを強く感じます。私が思いますのは、それを誰が担うのかという話です。先ほどからのお話に出ています高度専門人材の外国人や、技能実習生、留学生など外国籍の方、あるいは、国内のいろいろな地域から来られて長崎に定住してくださる

方、そういう方を積極的に取り込むことと、それから元々長崎の人で地域をよく知り初等教育段階から地域のことを学んだ人達、子ども達をいかに長崎に定着させていくことがとても大事なんじゃないかと思います。はっきり言って、人がいないと何もできない。ところが、長崎県の現状は、若者の東京や福岡への流出が近年加速化しています。18歳で就職や進学のために転出して長崎県には帰ってこない、あるいは、県内の大学を卒業した学生の半分も県内の企業等には就職しない状況です。県内の重要な地場産業に従事する人、公務員や教員を希望する人も減り、また、医療系の人材なども県外に流出してしまう傾向が最近強くなったと思います。その中でも特に私が危惧しているのは、若い女性の都市部への流出が顕著になったことです。やはり、地方には、一般的に女性の活躍を阻む企業風土や地域風土が残っているのではと思うのです。女性が地域に定着して伴侶を得て出産に至らないと少子化問題は解決しないわけですので、実は少子化問題はジェンダーの問題と深く関連しています。女性が自分のキャリアと子育て、つまり、個体保持と種の保存という二大本能、人間でいうと仕事上のキャリアアップと子どもを産み育てることが両立しにくいことに危惧を覚えます。最近、特に大都市部のお金のある自治体では、若い人の子育てを応援するために様々な政策を打ち出していると聞いています、長崎県の財布はちょっと厳しいところもありますけれど、そういうところを充実させていただきたいと思います。

また、10年後の長崎がどうなって欲しいかというお尋ねについては、若者が県外に流出し人口が減少していくことは、地域の働き手の不足とイコール関係で、地域の労働力の不足は、高齢者の生活を脅かすものとなります。地域の継続性を考えると、病院や介護施設で働く人の不足だけではなく、例えば、水道、電気などのライフラインの保全や、交通機関の維持に携わる人すら少なくなっていくと、最近、バスの運転手さんが足りないなんていう話も聞きますが、高齢者が地域に住めなくなってしまうので、そういう状況を何とか回避して欲しいと思っています。また、最近の激しい物価高はストックで生活している高齢者にとって、勿論、年金もあるものの、今年10万円で買った物やサービスが、15万、20万に値上がりすれば、ストックが目減りすることになり、比較的豊かな高齢者でも将来に大きな不安が生じるのではないかと考えています。それをどうしたらいいのかについては、最初に戻りますが、高齢者の安定した安全な日常生活の持続にも、働き手である若い世代の定着が非常に重要だということになります。けれど、良い仕事や面白い環境がないと若者は戻ってこない。定着を促すには、新たな産業を興していくことが無論大事です。加えて、高齢者も自分たちの生活が次の世代によって支えられていることを自覚し、若者や子どもを育てていくという意識を高める必要があると思います。高齢者と現役世代、そして子供が交流し連携し、次世代育成力を高めていく地域の取組を進めていければと思います。高齢者文化、若者文化と縦割りで考えられがちですが、長崎県として、高齢者・若者・子どもが交流し連携する場を提供していただきたい、それは公的な費用でできることであり、そこから新たな事業が起こる可能性も十分あるのではと考えます。実は、自分が75歳、80歳になった時、長崎県はどうなっているかと考えると心配でたまりませんが、高齢者と若い世代の交流連携の促進に希望を持っているところでございます。

●浦 企画部長

ありがとうございます。人口減少、若者の流出という深刻な課題がある一方で、最後の方にありました高齢の方と若者現役世代と子ども達が、この次世代育成という観点から何かそこで繋がっていく、好循環が続いていくような、そんな長崎県の姿が一つできればいいというご意見をい

ただきました。ありがとうございます。

佐藤委員、お願いいたします。

○佐藤委員

ちょっとちゃぶ台返しみたいになっちゃうかもしれないんだけど、結局、コロナ禍でいわゆる人口移動が進むだろうということで、地方に流れるといわれたが、既にもう東京に逆戻りしてる傾向がある。結局、10年後にどうあってほしいかというような議論をしていくわけですけど、基本的に今話されてることというのは、アプローチというかな、そういったところだと思うんですね。多分。非常に、人が長崎を目指していくとか注目していくというためには、長崎県が個々の県民に対してどういうライフ、生活というかそういうもの、人生というもの、送れるものをどう提供できるかという考え方、そういうビジョンというのを作る必要はあるような気がするんですよ。それこそがまさにバックキャストの考え方。そういう生活を保証していくための施策として何を打っていくか、そして今あるべき課題をどう克服するかというやり方をするというのが、多分さっき十八親和銀行の方が言われたことだと思います。

そこが実は長崎県の一番不足してる場所というのが、ワクワク感なり期待なり、チャレンジできるという言葉を使いながらもチャレンジをさせてないというところ。若い人達をもっとトライ・アンド・エラーできるような、失敗したっていいじゃない、もう一度チャレンジしなよっていう場と機会っていうかな。そしてあともう一つ資金だよ。そういうものを与えるということをもっと積極的にやる。結局、昔の楽市楽座じゃないけど、人が集まってくるところには、何らかのそういう思いを持った人がいれば、それが離島であろうと本土であろうと、その場に人は集まってきてそこにビレッジ、町ができて上がる。それをシェアしていこうっていうことをもっと積極的にやったほうがいい。結局、学生を見てても、うちの場合は県内就職が7割とか、そんなになってるからだけど。でも結局のところ、要するにマッチングの問題で、結局、今後にそういう自分の好みと合うものがない、だから出ていくっていうのであれば、あればできるはずですよ。

だからもっと若い人達にやるため、そのためには、長崎ってやっぱりいいとこだよなっていう、さっきのふるさと教育で、それをもっと鮮明にやらせるべきです。もっと言えば、都会の子育てをしている若い親達が、この長崎だったら自分の子どもにとっていい教育が提供されるんだたら行ってみようって気にさせることができる。そこをもっとしていくことが必要なんだと。そう考えると、今までのいわゆる利便性というようなところを中心に考えたところが、多分アメニティとかの快適性ということで、それがウェルビーイングの考え方に繋がっていく。そういうものだと思います。

実は、ウェルビーイングという概念を、うち短大から4大になった2002年の大学を作るコンセプトに実はウェルビーイングを入れて、それを作るのが福祉コミュニティだということやって、それを実現できる人材を作ろうということをやっています。20年経ってまだできてない。すみません。ウェルビーイングを別の定義で言えば、自己実現、すべてのいろんな人が自己実現できる社会というふうに考える。やっぱり夢を持たせるべき。だから子ども達にその自分の住んでいるところへのいわゆる夢を持たせるためのいわゆる帰属性。だから、それやっぱり地域のコミュニティが子ども達を中心とした中で構成されていく。そんなようなコミュニティ形成というものをきちんとしていくということがすごく大事。学生がタイのスタディツアーに行ってきた報告した

時に面白いことを言った。タイの小学校とかそういうところは子どもを中心にコミュニティが動いている、日本は違うということを行った。すごく強烈に残っている。やっぱり次の若い世代のそういう子ども達を本当に中心として考えるならば、教育のあり方も変わってくるでしょう。さっきも言ったように、自然観察もそうだし、いろんな実験とか体感として感動を生むような教育を提供できているか。はっきり言って学力の、点数の良い悪いじゃないと思う。実際そんなことで社会に出てみんなどうなってるの。むしろクリエイティブな発想ができるとか、そういったような人材を育てていくというようなこととか、もっとあるんじゃないですかね。何か「あんた面白いね、どこの出身ね。」と言った時に、「長崎出身です。」と言わせることができる。そのような教育も含めたコミュニティを作っていくというのが、僕はその一つの確信を持っていたのが、先ほど言った小値賀ですと20年ぐらいかかわる中で感じた。市町村合併しないとか、彼らがなぜそういう考え方、自分達が自分達の意味を持っていくための権利を確保したいということで、合併しなかった。それを現場で見てきたし、そういうようなことの価値というものを与えてきた。別に私が教えてるわけじゃないけど。だからそういう意味でいくと、さっき指標の問題も実は出たけど、今流行りのKPIに振り回されることは、僕はないと思う。変にKPIの数値目標を達成すればやったという気持ちになるよりも、むしろアウトプットじゃなくて、アウトカムの中でどれだけの方がどういう新しい価値観を持って生きていくとか、何かそういうものにシフトしていくという社会を、今、日本の社会とか、地域でできていないことを、この長崎でやるということに意味があるんだ。そうすれば、日本だけじゃなくて世界から集まってくるじゃないか。そのためにはもっと何ていうか、10年後の姿を描くということよりも、長崎県は、ここに住めばどういう生活が新たに提供できて、あなたは幸せになれるんだよというメッセージをもっと出す。それが何か必要な気がいたしました。

●浦 企画部長

貴重なご意見ありがとうございます。まさにその長崎でどんな暮らしを提供できるか、どんな楽しさ幸せがあるかという、まさに我々もこのビジョンの中でどういうふうを示すかというところが問われるんだろうと思います。その中でおっしゃられました特に子ども達ですね。将来の可能性を長崎の地で感じてもらえるような、そういう教育のあり方も含めて、どうしていくかというのは非常に大事だし、ウェルビーイングにも繋がるのかもしれませんが、やっぱり長崎でそれぞれの人達が自己実現できるような暮らしが長崎でできるんだ、その長崎の姿というのはこんな姿なんだというのを上手にわかりやすく示せばなというふうに思いました。ありがとうございます。

楠本委員、お願いいたします。

○楠本委員

皆さんの貴重な意見をいろいろ聞かせていただいて、いろんな経験と知識を持ってる方のそれぞれの熱い思いが出てきたと思うんですね。この個人の熱い思いを、ここは私達が意見を交換する場なんですけど、できたら県庁の方々の思い、熱い思いを、長崎をこんなふうなまちにしたいと、言った方が活性化すると思うんですね。やっぱり何か伸びている地域は、彼杵にお茶があります

が、お茶農家さんとお話をする機会があったり、役場の方とお話する機会があったりするんですが、役場の方が熱いんですよ、おっしゃることが。何としても、東彼杵町をお茶で何とかしたいんだっていう意思とか目標が、もうビジョンが見えるんですね、その言葉から。他の会議に出席させていただいたことがあるんですが、こういう意見が出ました、一旦終わって次の回までにこういうことに修正しました。達成率、何%になりました、だからOKですだったら何も変わらなくて。数字はOKなんですけど、市民の生活はそう変わってないし、市民は全然知らないんですよ。今回の資料で富山県の事例を読ませていただいたんですが、たった一言のスローガンが、わかりやすかったんですよ。例えば全員が同じことを話せるくらい共有したほうがいいなって今回思いました。あと計画が幾つかありますよね。令和5年度の重点施策があると思うんですが、この1個1個に関して、取りまとめて誰かが話すのではなくて、これに関して県の方で熱く語れるとどなたかがいらっしやるのもっと活性化するかなっていう、今まで、会議に出てそういうことをされてるのを見たことがないので。あるとすごく密に感じる。何となく県庁と市民が離れてるんですよ。こんなことやります、こんな場所を作りましただけじゃ駄目で、もっと密になるっていうかな。県庁職員と市民・県民がもっと交わるような施策にしたら10年後が見えるかなって、皆さんの話を聞く中で思いました。以上です。

○村上委員

便乗させてもらっていいですか。そうなんです。僕もなんかこうずうずしてらなって思ったのは、この皆さんとも話したいんですよ。考えられてることとか、今まさに話されていて、新しいことやろうとしてるのに。これまた言わないほうがいいのにもいつも後で後悔するんですけども、この会議の形式がもうちょっとディスカッションできるような形にまずしたほうがいいのかなっていうところで、もしそれが可能であれば、何か皆さんそれぞれお知り合いもいらっしやると思うんで、何かそのできる方にその進行をお任せするとか、例えばもう少しグループに分かれて、それこそ県庁の方とかも入っていただいて直接お話させていただく中で、じゃあ具体的にこんなことがそれぞれで出てきたみたいなのが出てくるような形だといいなって。すみません。聞いていてやっぱり僕だけじゃなかったんだと思って。

○楠本委員

10年後を想像した時に、10年後にこのメンバー全員が揃ったとして、例えばこの幸せ人口1000万って書いてありますけど、長崎人口何万人とかでもいいと思うんです。それを達成した時に「やった」ってみんなで言えるくらいの本気度というか行動力がないと、駄目なのかなって、変わらないなってちょっと感じてらんですよ。今回新しい試みなのかなって思ったので受けさせていただいたんですが、せっかく変わろうとしている時なので、そこにチャレンジしてもいい。私達が一生懸命意見を交換して、こんな事をやりたいんだよっていう。これだけやってるんだけど、あんまり結果が伴わないよとか。数字上はいいんだけど、満足してないんだっていう、何かリアルなものをできたら、やりがいが出ると思います。

●浦 企画部長

ありがとうございました。実は、二巡目でディスカッションをと思ってたんすけど、ちょっと進行がまずくてすみません。お時間が、皆さん熱心にご意見をいただいでですね、時間がちょっと切れてしまったんですけど、委員さん同士の間で意見交換、ディスカッションは是非と思ってたんすけど、今回できませんでしたが、そういう時間はぜひ取りたいというふうに思いますし、その間にも少し個別に委員さんのご意見も聞いて、またそういうのも反映させながら、ディスカッションする場を設けたいと思います。

実は、最初からこちらのものを示すというよりは、まずは10年後の姿、ありたい姿でしたので、いろんな分野でいらっしゃる委員の皆様から、まずはどんなことを日頃からこう感じておられて、長崎に対する見方、思いというのがあるかなというのを、率直なご意見をまずお聞きしたいというのがあって、まずこういう席を設けさせていただきました。取りまとめた段階では、それぞれの地域にも入り込んでいって皆さんと共有できるようにしたりとか、また現場の声はどんどん聞きたいと思っていますし、ご指摘いただきたいいわゆる県民の皆さん、地域の皆さんとの距離感みたいなものをできるだけ短く近くできるようなことは是非やっていきたいというふうに思います。ご意見ありがとうございます。

ということで、ちょっと時間が過ぎてしましまして、すみません。本当は二度三度意見交換をさせていただきたかったんですけども、ご意見いただきましてありがとうございました。

その中でもディスカッションを深めることはできませんでしたが、いろんなご意見としていただいた中で、キーワードもいくつかあったように思います。多様性という言葉が出ましたし、多様性もその一般的な多様性だけではなくて、いわゆる長崎県における多様性というのは何なのかということをしっかり認識していくことであります。ウェルビーイングというのもありましたけれども、そのほかにもいわゆる寛容さ、受け入れる意味での寛容さ、まさにさっきのチャレンジ、トライ・アンド・エラーを許すというのもそうかもしれませんけれども、そういういろんな寛容性というのも一つのキーワードとしてあったのかなというふうに思います。それから不自由を感じないとか、楽しい暮らし、ワクワク感。そういう話もあったかと思っていますし、キーワードとして出てきたのはやっぱり子ども達、どう子ども達に未来を感じてもらえるか、あるいは可能性を与えられるか、それを感じられる姿をしっかり我々が描いて示すことが必要なんだろうというのを改めて今日感じさせていただきました。

今日のご意見はまた整理をさせていただきまして、必要に応じて個別にご意見もいろいろお聞かせいただいた上で、2回目の懇話会を開かせていただきたいと思います。その場ではもう少し将来の姿を、今日いただいた意見をまとめる中で示しながら、そのためにまたさらに何が必要なのか、どんな取り組みが必要なのかという、そういったご意見もいただいでいければと考えております。次回はディスカッションできるように。今日は進行がまずくて申し訳ございませんでした。しっかり時間をとりながらやりたいと思います。全体で3回を予定しています。できれば、ちょっとその間、個別に委員の皆さんのご意見を伺いたいなと思ったりもしています。

最後にどうしても言いたいことがあられる方はございませんでしょうか。

○大川委員

もうちょっとざっくばらんに、やっぱり何かいろんな本音が出るのって、飲み会とかじゃない

ですけど、何かこうもっと近くなんか話そうぜみたいなんですけども。何かこう一緒についているところがあるのかなって。

●浦 企画部長

ありがとうございます。是非、今のご意見も含めて、次回開催できるようにしたいと思います。本日は本当にお忙しい中皆様お越しいただきまして、また貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。引き続き、またいろいろご相談させていただきます。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

●事務局（伊東 政策企画課企画監）

これで第1回懇話会を終了させていただきます。ありがとうございました。

以上